

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 18 日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370815

研究課題名(和文) マグリブ・アンダルスにおけるウマイヤ家像の変遷

研究課題名(英文) Images of the Umayyads in al-Andalus and al-Maghrib

研究代表者

佐藤 健太郎 (SATO, Kentaro)

北海道大学・文学研究科・准教授

研究者番号：80434372

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、イスラーム史上最初の世襲王朝をたてたウマイヤ家がマグリブ・アンダルス地域の歴史叙述の中でどのように描かれてきたのか、その11世紀以降の変遷を明らかにすることを目的とした。史書の中でのウマイヤ家像、伝記集を通してみえるウマイヤ家の末裔の存在、そしてモリスコのウマイヤ家像に連なるキリスト教徒の歴史叙述に見えるウマイヤ家像の3点について検討した。継続して検討すべき課題も残ったが、研究当初には予想していなかった成果もあり、中東地域とは異なる視覚からのカリフ論の可能性にもつながる成果をえることができた。

研究成果の概要(英文)：This study aims to show how the Umayyads, the family who had built the first dynasty in the Islamic history, were described in the historiography of al-Maghrib and al-Andalus after the eleventh century. The study focused on three points as follows: 1) images of the Umayyads as appeared in Maghribi-Andalusi chronicles, 2) descendants of the Umayyads who appeared in biographical dictionaries, and 3) images of the Umayyads in Christian chronicles, which might affected images of the Umayyads among Moriscos.

研究分野：マグリブ・アンダルス史

キーワード：ウマイヤ家 アンダルス マグリブ カリフ モリスコ スペイン

1. 研究開始当初の背景

イスラーム史上最初の世襲王朝(661~750年)をうちたてたウマイヤ家は、後世のイスラームの歴史叙述においては必ずしも肯定的な評価を与えられていない。この要因としては、ウマイヤ朝期にはまだ本格的な歴史叙述が誕生していなかったためにウマイヤ家の立場から語られた史料が少ないこと、残された史料の多くがウマイヤ朝を打倒して樹立されたアッバース朝やウマイヤ朝によって初期の指導者を殺害されたシーア派の立場から記されていることが指摘できる。

しかし、このような状況はイスラーム世界の中でもエジプト以東の東方において当てはまることである。西方のアンダルス(イベリア半島)地域には、ウマイヤ家の亡命政権である後ウマイヤ朝(756~1031)が2世紀半にわたって存続し、10世紀にはカリフを称するに至る。当然、この時期のアンダルスにおいてはウマイヤ家出身のカリフを正当化する歴史叙述が生まれることになった。11世紀に後ウマイヤ朝が滅亡した後にアンダルスに林立した群小諸王国(ターイファ諸王国)においても、ウマイヤ家の名を刻んだ貨幣が発行されるなど、彼らの権威は依然として意識されていた。東方とは異なるウマイヤ家観がここには存在したのである。

しかし、サハラに勃興したムラービト朝(1056~1147年)がマグリブ(北西アフリカ)ついでアンダルスを征服した11世紀末以降のウマイヤ家像については、いまだ明らかとなっていない。確かにこの時期以降のマグリブ・アンダルス地域の歴代諸政権は、ウマイヤ家の権威に拠ることなく自らの支配の正当性を主張していた。ムラービト朝はアッバース朝カリフの宗主権を認め、次のムワヒド朝(1130~1269)はマフディー(救世主)の後継者を標榜したため、ウマイヤ家の権威を活用する余地はなかった。ところが16世紀になると、キリスト教徒に征服された後のイベリア半島において、強制改宗を余儀なくされたモリスコ(元イスラームとその子孫)の間にウマイヤ家の末裔を名乗るアベン・ウメーヤ(イブン・ウマイヤ)が現れ、大規模な反乱(第2次アルプハーラス反乱)を起こしている。これをみると、イスラーム共同体を率いるにふさわしい家系としてのウマイヤ家像が何らかの形でアンダルスのイスラームやモリスコたちの間に受け継がれていたことがうかがえるのである。しかし、この間の11世紀から16世紀に至るまでのマグリブ・アンダルス地域におけるウマイヤ家像の変遷は不明のままである。

2. 研究の目的

上述のような背景をふまえ、本研究では11世紀以降のマグリブ・アンダルス地域におけるウマイヤ家像の変遷について明らかにすることを目的とした。

具体的には、以下の3点について検討し

らかにすることを目指した。

(1) 後ウマイヤ朝が滅亡した11世紀以後にアンダルスやマグリブで編纂された歴史書においてウマイヤ朝および後ウマイヤ朝の統治がどのように語られているかを明らかにする。その際、編纂者・伝承者と同時代の権力者との関係を考慮に入れながら、王朝権力や統治理念の変化と共にウマイヤ家像がどのように変遷していったかに焦点をあてる。また、後ウマイヤ朝が直接統治したアンダルスとそうでないマグリブとの相違にも留意する。

(2) 11世紀末以後もウマイヤ家の末裔がアンダルスやマグリブ地域に存在していたことは、知識人の伝記集史料などから確認することができる。これら現に生きているウマイヤ家出身者の存在は、同時代のウマイヤ家像にも何らかの影響を及ぼしたと考えられる。ウマイヤ家の系譜を持つ11世紀末以降の知識人や名士の伝記的情報を収集して、当時のウマイヤ家像との関連を明らかにする。

(3) アベン・ウメーヤを奉じて反乱を起こしたモリスコにとって、歴史的知識の情報源はイスラームの歴史叙述だけでなく、キリスト教徒の歴史叙述の中にもあったと想定できる。そこで、中近世イベリア半島のキリスト教徒の歴史叙述の中でウマイヤ家がどのように描かれていたのかを、終末論的な言説も考慮に入れながら明らかにする。また、イスラームの歴史叙述にあらわれるウマイヤ家像とモリスコが抱くウマイヤ家像との関連性も検討する。

3. 研究の方法

文献史学の方法により研究を進める。具体的には、上記の(1)を明らかにするためにアンダルスおよびマグリブで編纂されたアラビア語史書の分析をおこなう。また(2)を明らかにするために同じ地域で編纂された知識人・名士の伝記集の分析をおこなう。さらに(3)を明らかにするためにイベリア半島のキリスト教徒側で記された史書の分析をおこなう。

4. 研究成果

(1) アンダルスおよびマグリブで編纂されたアラビア語史書の分析をとおして、当該地域におけるウマイヤ家像を検討した。その結果、後ウマイヤ朝滅亡後であっても、多くの場合、ウマイヤ家政権は当該地域の歴史の中に、特に否定的な評価を与えられることなく、カリフ政権として位置づけられていることを確認した(ただし、ムラービト朝期については史料上の制約もあり、はっきりとしたことは言えない)。

もちろん、これはウマイヤ家政権が「唯一の」正当なカリフ政権として見なされていた

ということではない。むしろ、様々なカリフ政権の権威が入れ替わりながら展開してきたこの地域の歴史が、ありのままに理解されてきたと見なすべきであろう。後ウマイヤ朝のみならず、ファティマ朝やムワヒド朝といった政権がそれぞれカリフを名乗り、また時にはムラービト朝のように遠く東方のアッバース朝カリフの権威を借りたように、この地域の歴史においてはカリフの権威の淵源は必ずしも単一ではなかった。そうした状況のもとでは、直接的な競合関係さえなければ、過去のカリフ政権は、特段の否定的な意味を与えられることもなく、単なる歴史上の事実として認識されていたのではないかと考えられる。

これを反映するのが、アンダルス最後のイスラーム王朝ナスル朝(1232~1492年)のウマイヤ家観である。ナスル朝君主がチュニス朝のハフス朝君主に1368年に送った書簡の中においては、過去のコルドバの後ウマイヤ朝政権は、キリスト教徒の南進によって失われてしまったかつての輝かしいアンダルスの繁栄の記憶を喚起するものとして描かれている。もちろんナスル朝自体は必ずしもウマイヤ家のカリフ権を自らの統治権の源泉としているわけではない。彼らは時にハフス朝カリフの権威を認め、時に自らの王権をカリフ的な修辞で飾るなどしていた。そうしたナスル朝にとってウマイヤ家は、数あるカリフ政権の一つであり、特に自らの統治がその系譜に連なるわけではなかったにしても、必要があれば称賛の対象としうるような存在だったのである。

こうしたマグリブ・アンダルス地域独特の多元的なカリフ観は、イブン・ハルドゥーン(1406年没)の有名な史書『歴史序説』にも反映されている。彼は、東方の神学者の議論などにもよりつつ、非常に遠距離にあって一人の人間ではイスラーム共同体の統治が行いがたい場合は、同時代に二人の指導者が並び立つことを容認する説があることを論じている。アッバース家カリフの権威が突出して大きな存在感を有していたマシュリク地域と異なり、マグリブ・アンダルス地域では、ウマイヤ家もまた様々なカリフ政権の一つとして、人々の歴史認識の中に正当に位置づけられていたのである。

(2) アンダルスおよびマグリブで編纂されたアラビア語伝記集に収録されたウマイヤ家出身者の分析をとおして、彼らの存在が11世紀以降の当該地域のウマイヤ家像に与えた影響の検討を試みた。しかし残念ながら、この試みはまだ大きな成果にはつながらない。

確かに、伝記集からは、ウマイヤ家出身者を名乗る知識人や名士を少なからず抽出することができる。例えば、18世紀になってもマグリブ西部の都市フェスにはマフディー・ウマウィー(ウマウィーとはウマイヤ家

出身者を意味する由来名)なるスーフィー兼イスラーム法学者がいた。彼は、アブー・スフヤーン(シリアのウマイヤ朝初代カリフ・ムアウィヤの父)に連なる系譜を持ち、その祖先はアッバース朝によるウマイヤ家虐殺を逃れてアンダルスに到来したのだという。また、ウマウィーを名乗る人物の中には、ウマイヤ家のマウラー(解放奴隷などの従属者)に連なる系譜を持つ者もいる。

こうした事例からは、マウラーのような擬制の血縁関係も含め、ウマイヤ家ゆかりの者たちが後ウマイヤ朝滅亡後もマグリブやアンダルス地域には広く残存していたことが分かる。このような系譜が記憶されている以上、ウマイヤ家出自であるということは、社会の中で一定程度の意義を有していたということにはなる。しかし、そのことと史書などにあらわれるウマイヤ家像との関連については、まだ直接的な影響関係を見いだすには至っていない。この点については、継続的な課題としたい。

なお、ウマイヤ家のマウラーについては、当初は執筆時期の関係で検討対象となっていなかったイブン・アル＝クテーヤ(977年没)の史書をも検討したところ、後ウマイヤ朝建国の叙述が、後ウマイヤ朝建国の功臣であったマウラーたちの出自来歴についての伝承を核として編纂されたことが明らかとなった。史書が執筆された10世紀当時にはこれらマウラーの子孫はアンダルス社会の支配層を構成しており、史書中には10世紀当時を生きるその子孫たちへの言及が頻出する。したがって、この史書は同時代の社会の成り立ちを、ウマイヤ家による権力獲得に仮託しながら説明したものともいえる。この点は、史書やその情報源となる様々な伝承を考えるうえで示唆的であろう。

(3) イベリア半島のキリスト教徒の歴史叙述の分析をとおして、モリスコたちのウマイヤ家像との関連を検討した。

16世紀半ばのモリスコ反乱の指導者アベン・ウメーヤは、ウマイヤ家出身であると伝えられており、この系譜がアンダルスの復興をもたらす者として、モリスコたちの期待を、一方でキリスト教徒たちの恐れをかきたてたことは間違いない。また、彼は反乱以前にはスペイン語でフェルナンド・デ・コルドバ・イ・パロルと名乗っており、コルドバという姓がウマイヤ家の記憶と何らかの結び付きをもっていた想定することもできる。しかし、こうしたアベン・ウメーヤ像とイベリア半島のキリスト教徒の歴史叙述との間に明確な関連性は、まだ見いだすことができておらず、この点についても継続的な課題とせざるを得なかった。

なお、スペインでの現地調査を経て、現代スペインにおけるウマイヤ家像という新たな問題も浮かびあがってきた。アベン・ウメーヤの一族が住んでいたアルプハーラス山

地のバロル村には、彼らのものだったと伝えられる邸宅がある。ここにはアンダルシア地方のイスラーム団体によるアベン・ウメーヤを顕彰するプレートがあり、産業に乏しい村の振興のためであるうか、行政側にもそれを活用しようという動きがある。その一方で、この地域には反乱時のモリスコの暴力行為についての伝承も伝わっている。スペインにおいては、アンダルスをめぐる歴史認識は複雑で多様な様相を呈しており非常に大きな研究テーマであるが、本研究の成果もこうした問題と関連づけることで、さらなる広がりが見込めるであろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

中村 妙子・柳谷 あゆみ・橋爪 烈訳註、佐藤 健太郎・五十嵐大介註「イブン・ハルドゥーン自伝 8」『イスラーム地域研究ジャーナル』、査読無、8、2016 年、pp. 64-91

高野 太輔・佐藤 健太郎・湯川 武・茂木 明石訳註「イブン・ハルドゥーン自伝 7」『イスラーム地域研究ジャーナル』、査読無、7、2015 年 3 月、pp. 40-56

〔学会発表〕(計 1 件)

佐藤 健太郎「17 世紀チュニジアのモリスコ」第 39 回地中海学会シンポジウム「海のかなたへ 移動と移住」2015 年 6 月 21 日、北海道大学(北海道札幌市)

〔図書〕(計 1 件)

佐藤 健太郎「17 世紀チュニジアのモリスコ」神崎 忠昭編『断絶と新生 ～中近世ヨーロッパとイスラームの信仰・思想・統治』慶應義塾大学言語文化研究所、2016 年、pp. 233-260、全 263 頁

〔産業財産権〕

○出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：

番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

佐藤 健太郎 (SATO, Kentaro)
北海道大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：80434372

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：

(4)研究協力者

()